

八天遺跡の内容と価値

1 遺跡の位置と過去の調査

八天遺跡はJR北上駅から北北東へ約6km、北上川東岸の台地上に立地します。昭和43～44年度、昭和50～52年度の2回にわたって調査が行われました。

昭和43～44年度の調査では、平安時代の役所跡の可能性が推測されましたが、後に該当する遺構は存在しないことが確認されました。

昭和50～52年度の調査では、中世の城館跡、平安時代や縄文時代の村の跡が調査されました。中でも注目を集めたのが縄文時代の村の跡です。



上空からみた八天遺跡（南から）

2 昭和50～52年度の調査内容と史跡指定

縄文時代の村は、見つかった土器の装飾などから、約4,500～3,200年前に営まれたものと考えられますが、特に約3,800～3,500年前の村において、3つの重要な発見がありました。

①大形建物跡

縄文時代の家の跡は、一般的には円形に床を掘りくぼめ、そこに炉や柱穴を備えています。これらは直径5m（広さ20㎡）程度のものです。ところが八天遺跡で見つかった建物跡はこれを大幅に上回る大きなものでした。当初の建物は長径17m（広さ180㎡）と推測されています。この建物は同じ場所で何度も建て替えられ、次第に小さくなっていきます。しばらくは長径11～13m（広さ80～100㎡）前後で推移しますが、最終的には長径8.4m（広さ50㎡）ほどにまで縮小します。



八天遺跡の主要調査区（昭和51年、南から）



大形建物跡（昭和51年、南から）



耳・鼻・口形土製品（重要文化財、市立博物館本館にて展示）

この大形建物の意義は「とても大きい建物である点」、「何度も同じ場所で建て替えられた点」の2つの特徴に集約されます。

前者の特徴からは、この建物を利用した人々の数の多さが想像されます。また後者の特徴からは、この建物の存続期間の長さや、縄文人の強い思い入れがうかがわれます。こうした建物の性格として、集会所、あるいは祭祀に関連する施設であった可能性などが考えられます。

②耳・鼻・口形土製品

大形建物跡の西側では多数の穴がみついています。これらは建物の柱穴や、木の実を貯えるための貯蔵穴、あるいは縄文人の墓穴ではないかと考えられています。こうした穴の中から、人間の耳・鼻・口を模した実寸大の土製品がみつかりました。いずれも小さな孔が穿たれており、紐で何かに括り付けて仮面として使用されたと考えられます。儀式用とも、死者への供物とも考えられますが、後述するように、八天遺跡には墓域が形成されていることから、死者への供物とする説が有力です。

③焼けた人骨

縄文人は死ぬと、ほとんどの場合、そのまま地面に掘られた穴に埋葬されたと考えられます。現在のように火葬して骨だけを埋葬することは稀でした。ところが、八天遺跡の穴の中から焼けた人骨が見つかった例があります。それも、複数の人間の骨の一部が集められて埋められていたというのです。中にはイノシシの骨が紛れていたものもあります。この事例が直ちに火葬に結びつくものではありませんが、極めて興味深い発見です。いずれにしても、遺跡の中に墓域が形成されていたことは間違いなく、大形建物跡や耳・鼻・口形土製品の性格・用途を考える上でも、極めて重要です。

以上の調査成果により遺跡の重要性が明らかになったため、八天遺跡は昭和53年2月22日に国の史跡に指定されました。また、耳・鼻・口形土製品は平成4年6月22日に重要文化財に指定されました。

3 保存活用計画策定にむけて

北上市教育委員会では、今年度から八天遺跡の保存活用計画策定を進めています。保存活用計画とは史跡を恒久的に保存し、積極的に活用することを目的とするマスタープランのことです。今回の発掘調査は、この計画策定に寄与することを目的として実施されました。大形建物跡の南側隣接地を調査した結果、建物跡に先立つ集落の存在が明らかになりました。この知見を活かしながら、八天遺跡の本質的価値を明確にし、令和3年度には保存活用計画を策定する予定となっています。その先には史跡整備も含む、八天遺跡の活用を見据えています。



← 大形建物跡
約3,800～3,500年前

- 内容が明らかな調査区(1975・76年)
- 今年度の調査区(2020年)
- 貯蔵穴(約4,500～3,200年前)
- ★ 複式炉(約4,500年前)
- 墓坑(約4,400～3,200年前)
- 土器埋設遺構(約3,200年前)

Y=+28,000
X=-74,500

南東の土器捨て場

南西の土器捨て場

北西の土器捨て場

← 墓域
約4,400～3,200年前



← 鼻形土製品が
出土した墓坑
約3,500年前

Y=+27,900
X=-74,350

史跡八天遺跡の調査区と遺構配置

0 20m